

オマケの掌編・短編集

夜桜の下、仔犬を連れた奥さん 書き直し版



夜桜が街灯に映えて綺麗な春のある宵、会社帰りに公園の脇の道で、子犬の散歩をしている斜め向かいの奥さんと出会いました。

「お仕事ですが？いつも遅いんですね。お疲れでしょう。ご苦労さま」と言うので、

「奥さんこそこんな時間に、毎日わんちゃんのお散歩ですか？大変ですねえ。どなたか他にご家族の方はなさらないんですか？」

と訊くと

「主人も子供もしないんで、しかたありませんわ。誰かがしないとこの子が可哀想ですから」と答えました。

「お優しいんですねえ」

と言うと

「本当は気分転換」と言った後で、

「うんう、本当はダイエットが目的ですよ！」

と幾分おどけた感じで答え、口元を緩めて笑いました。

自分は、以前、心の病の長患いが元で、家族に捨てられて、今は独り者でいる、という思いが心の片隅にあったせいか、ついつい

「お幸せそうでいいですねえ」

と羨む（うらやむ）と

「そうでもないですわ。外見（そとみ）からはどう見えているか分かりませんが」
と少し陰のある口調になったので、自分は奥さんの今の穏やかな生活のあり方を肯定してあげるつもりで、その比較に今時の若い人を持ち出して、

「幸せと言えば、結婚式が頂点で、その後だんだん下がっていくより、結婚式はほどほどで、その後、だんだん上がって行った方がいいですよ。今の若い人は、みんな結婚式に力を入れすぎているような気がします」

と独り言の評論みたいに言ったのです。

すると、奥さんは、返答に困っているのか、暫く沈黙がつづいた後に、ふと見ると、薄暗い夜目にも、急に涙ぐんだ様子が感じられました。

自分は動揺しました。

何か不用意な引き出しを引き出させてしまったのかもしれない。

「地雷を踏んでしまった」

それで

「春とは言え、まだまだ寒いですから、散歩もそこそこになさって、お家に帰られた方がいいですよ」

と言ながら、何事もなかったように、何も気づかなかったように、幾分逃げるようにしてその場を立ち去りました。

それからひと月たった大型連休のある中日（なかび）に、突然奥さんのご一家は引越されました。連休中とて、会社に出ていた自分は、そのことを後日、ご近所の方との立ち話で知りました。

引越すという話も聞きませんでしたし、挨拶もありませんでした。

いつも散歩や会社帰りで合う度に世間話をする間柄だったのにと、少し裏切られたようなさみしさを感じました。

しかし、少し落ち着いて考えてみると、どう想像を巡らしてみても、一抹の不自然さは拭えませんでした。

「もしかすると、矢張りあの時の」

自分が思い描いているイメージを元に使う言葉の持つ意味合いが、必ずしも相手の頭の中に同じイメージや意味合いとして再現される訳ではない。

それどころか、キャンディーをあげたつもりの言葉が、鋭いナイフを突き出されたように見えている場合もあるのかもしれない。

いや、その確率の方が思い描いたイメージ通りに伝わるより遙かに高いか、或いは、殆どが伝わらないのではないか。むしろ、思い描いたことが思い描いた通りに伝わる事が奇跡に近いのかもしれない。

そう思うと、改めて言葉を使うことの怖さを痛感すると共に、夜桜の下、奥さんがどんな

気持ちで仔犬を連れて散歩をしていたのかを思い、心の底から申し訳ない思いを感じました。

そうして自分は気づかぬうちに今まで、相手に喜んで貰おうとして、却って「糖尿病患者に砂糖菓子を与える」様な過ちを相当数犯してきたのではないかという疑念の渦に呑み込まれそうになりました。

「夜桜がほんのりピンク色なのは、その下に埋まっている人から滲み出した血を吸い上げているからだ」

という意味の、或小説の一節を思い出し、

「自分は奥さんをこの夜桜の下に葬ってしまったのかもしれない」

という恐ろしい連想に囚われ、自分の顔がにわかに変化し、街灯に照らされた夜桜の下で、耳元まで口が裂け、目の色が金色の中で血走った「夜叉の面（おもて）」に化け変わったような気がいたしました。

(完)